

# 韓日接触の痕跡としてのことわざ

鄭 芝淑

## 1. 異文化接触の痕跡

文化と文化とが接触するとき、その接触がどのようなものであっても何かその痕跡を残すものである。その痕跡の大部分はすぐに消えてしまうであろうが、長く残るものもある。韓国と日本は狭い海を隔てた隣国として、同じ漢字文化圏に属する国として、古くから密接な関係を持ってきた。それは両国の文化や風俗の様々な面に痕跡を残している。

江戸時代の日本と李朝時代の韓国は、どちらも鎖国政策を取り外部世界との接触を絶ってきた。そのため日本と韓国の国家的接触はほとんどなかったのであるが、唯一の例外があった。江戸時代に 12 回にわたって日本に派遣された朝鮮通信使である。秀吉による武力侵略の後始末として再開された最後の 12 回目の通信使は双方の財政的な理由により対馬に留め置かれたが、それ以外は、対馬から江戸まで陸路、海路の旅をした。数百人規模の使節であり、陸路を行く場合には笛太鼓の鳴り物入りで行列した。一生に一度見られるかどうかの大イベントで、沿道は見物客が殺到したと伝えられている。この朝鮮通信使の行列が、「唐子踊り」や「唐人踊り」という民族芸能として日本の各地にその痕跡を残している。

韓国に残った日本伝来のものとは言えば、代表的なものに花札がある。韓国では「화투 ファトゥ」とかあるいは方言で「ファト」と言い漢字では「花闘」と書く。「ファトゥ」は老若男女の区別なく楽しめる家庭的ともいえるほど健全な娯楽として韓国社会に定着している。その代り、麻雀はやくざの遊びという不健全なイメージがあり、日本とはまるで逆であることが興味深い。ほとんどの韓国人はこの「ファトゥ」が日本から伝わったものであることを知らない。これが日本統治時代に韓国社会に入ったことは明らであるが、ほとんど

の韓国人は韓国の伝統的な遊びだと思っている。筆者も日本に来るまでそう思い込んでいた。

人と人、文化と文化の接触が言語、言葉にその痕跡を残すこともある。日本の地名の「奈良」が韓国語の「나라 ナラ」と同語源であり、百済からの帰化人たちが持ち込んだものであると推定されることはよく知られた例である。比較的新しい例を挙げると、自転車のことを俗語で「チャリンコ」と言う。「チャリンコ」は一般的でなくても「ママチャリ」(婦人用自転車)はよく使われる。「ママが乗るチャリンコ」の略である。この「チャリンコ」については異説があるが、おそらく韓国語の「자전거【自転車】チャジョンゴ」に由来すると考えられる。在日韓国人が使っていた韓国語が日本人社会でも使われるようになった例であろう。

逆に、日本統治時代に日本語から韓国語に入った言葉は数え切れないほど多い。筆者の故郷である全羅南道の羅州(나주 ナジュ)は玉ねぎがよく取れる。玉ねぎを韓国語で「양파 ヤンパ」と言うが、これは比較的新しい語で、20年ほど前までは「다마네기 タマネギ」と言っていた。同じように「벤토 ベントー」(弁当)、「와리바시 ワリバシ」(割り箸)、「요지 ヨージ」(楊枝)なども日常語としてそのまま使われていた。日本語に由来するこのような語は戦後国語醇化運動の対象となり、次第に「純粹の韓国語」に置き換えられていくのであるが、「오뎅 オデン」「우동 ウドン」のようにほぼ完全に韓国語化して定着してしまっただ語もある。

羅州はまた、ナシの産地としても有名である。「나주배 ナジュベ」つまり「ナジュのナシ」といって、韓国で最もおいしい梨の取れるところで、実は筆者の家もナシの栽培農家である。ナジュベの品種名は、「신고 シンゴ」あるいは「신고배 シンゴベ」と言うが、これは漢字で書くと「新高」と書くこと、日本ではこれを「ニイタカ」と読み、「ニイタカナシ」は高知県の名産であることを、最近まで知らずにいた。日本語の「新高(ニイタカ)」が韓国語読みされて韓国語になっているわけである。調べてみると、「ニイタカナシ」というのは新潟県の品種と高知県の品種を交配させて作った改良種だそうで、それで「ニイタカナシ」と呼ぶようになったのだそうである。そのことを父に話したところ、父もそのことは知らなかったが、他にも「조지로 チョジロ」とか「이마무라 イマムラ」とかいう韓国語ではない名前の品種があるということをお話してくれた。「長十郎」や「今村」などの日本の品種名が使われているの

である。

このように、平和的であろうとなかろうと、人と人、文化と文化が接触するときには、言語や風俗習慣の中にその痕跡が残るものである。言語の一部としてのことわざにも文化接触が反映される。欧米に共通のことわざが多いのはそのためである。日本と韓国のことわざの中にも両文化の接触の痕跡が残されているのではないかと予測される。

## 2. ことわざ研究

ことわざの定義は難しく、ことわざ研究の最も難しい課題の一つとなっているが、とりあえず「昔から人々の間で言い伝えられ日常の言語生活で使われてきた、主として作者不明の、教訓や風刺を含んだ簡潔で口調のいい慣用的表現」としておくことにする。韓国ではことわざを「ソクタム【俗談】」と言う。

ことわざ研究にも様々な分野がある。まず、各地に伝わることわざを収集し、その意味を記述し分類・整理する「ことわざ収集」がある。ことわざ辞典の編纂はその産物である。次に、収集されたことわざの意味・用法や形式を分析し、ことわざとは何か、ことわざの特質はどのようなものであるかを研究する「ことわざ分析」がある。これがことわざ研究の中心を占める。また、文献を調査することによってことわざの由来、出自を明らかにし、語り伝えられるうちに生じた形式や意味の変化をたどる「歴史的研究」がある。さらに、ことわざは比較の対象にもなる。異なる文化のことわざを比較対照することによって、その異同を明らかにしようとする「比較ことわざ研究」がある。また、最近では、既存のことわざを対象とするのではなく、新しいことわざを創り出す試みを通じてことわざの特質の一端を明らかにしようとする「創作ことわざ」の活動も注目されている。

## 3. 韓国と日本の主要ことわざの比較

孔泰瑢編『韓国の故事ことわざ辞典』には 3,000 件弱の故事ことわざが収録されているが、そのほとんどに日本語の類句を与えている。つまり、少なくとも意味内容に関する限り韓国と日本のことわざは極めて共通性が高い。しかし、ことわざには文化の違いを超えた共通性があることはよく知られていることであり、また、上記の辞典の見出しことわざや類句ことわざの中にはあまり知られていないものも数多く含まれているので、日本と韓国のことわざに意味的に

共通したものがあること自体は特に注目すべきことではない。そこで、比較的よく知られていることわざ<sup>1)</sup>に絞って、日本のことわざと意味的な面ばかりではなく表現形式においても類似した韓国のことわざを取り上げ、日本のことわざとの関係を検討してみよう。

まず、次のようなことわざがある。( )内は韓国語から日本語への直訳、【 】内は対応する日本のことわざである(以下同じ)。

(1) 궁지에 든 쥐가 고양이를 문다 (窮地に入った鼠が猫を噛む) 【窮鼠猫を噛む】

[塩鉄論]

궁하면 통한다 (窮すれば通じる) 【窮すれば通ず】 [易経]

귀 막고 방울 도둑질한다 (耳を覆って鈴盗む) 【耳を掩うて鐘を盗む】

[呂氏春秋]

낙숫물이 댓돌을 뚫는다 (雨垂れが土台石を穿つ) 【雨だれ石を穿つ】

[漢書]

달도 차면 기운다 (月も満ちれば欠ける) 【満ちればかく】 [史記]

등잔 밑이 어둡다 (灯台の下が暗い) 【灯台下暗し】

마른 하늘에 날벼락 (晴れた空に雷) 【青天の霹靂】 [陸游の詩]

맑은 물에 고기 안 논다 (清い水に魚は遊ばない) 【水清ければ魚棲まず】

[漢書]

백 번 듣는 것이 한 번 보는 것만 못하다 (百回聞くのが一回見るのに及ばない) 【百聞は一見に如かず】 [漢書]

범 굴에 들어가야 범을 잡는다 (虎の穴に入って行ってこそ虎を捕まえる)

【虎穴に入らざるば虎兇を得ず】 [後漢書]

사람은 죽으면 이름을 남기고 범은 죽으면 가죽을 남긴다 (人は死ねば名を残し虎は死ねば皮を残す) 【虎は死して皮を留め人は死して名を残す】

[唐草八家文]

삼십육계에 줄행랑이 으뜸 (三十六計に逃げるのが一番) 【三十六計逃ぐるに如かず】 [南齊書]

우물 안 개구리 (井戸の中のカエル) 【井の中の蛙】 [莊子]

웃음 속에 칼이 있다 (笑いの中に刀がある) 【笑中に刀あり】 [旧唐書]

좋은 약은 입에 쓰다 (良い薬は口に苦い) 【良薬は口に苦し】 [韓非子]

천리길도 한 걸음부터 (千里の道も一歩から) 【千里の道も一歩から】

[老子]

큰 방죽도 개미구멍으로 무너진다 (大きい堤も蟻の穴から崩れる) 【大きな堤も蟻の一穴から】 [韓非子]

티끌 모아 태산 (塵集めて泰山) 【塵も積れば山となる】 [大智度論]

これらは意味においても形式においてもほとんど韓日共通のものである。それもそのはずで、これらの故事ことわざは中国の古典に由来するものである。このような中国起源のことわざについては、どの文献に最初に現れたのかがほとんどのものについて明らかにされている。日本で出版されていることわざ辞典はその点非常に親切で、3,000 から 5,000 個ぐらいのことわざを集めた中規模の辞典であれば、たいていそのような出典の情報が与えられている。上に掲げたそれぞれのことわざの末尾の〔 〕内に出典を示した。これら以外にもこのような中国起源のことわざや四字成語、故事成語が数多く日本と韓国のことわざの中に入り込んでいる。主要なことわざの中にはそれほど多くないけれども、大規模な故事ことわざ辞典ではこの種の例が極めて多くなる。これらは、韓国と日本が共に漢字文化圏の中でそれぞれの文化を発達させてきたことがことわざの中にも反映されていることを示す例であり、日韓両言語のことわざの成り立ちや特徴を考える上でたいへん重要なものであるが、日本と韓国の接触を直接的に反映するものであるとは言えない。

よく中国文化は朝鮮を経由して日本に伝わったと言われる。ことわざについてもそのような例があったかもしれない。中国起源のことわざが一旦朝鮮に入りそれが日本に伝わったということは、可能性としては考えられる。例えば、奈良時代以前に主に百済から多くの人々が日本に渡ってきているが、そうした渡来人が使っていた中国起源の故事ことわざが、日本のことわざとして取り込まれることになった、ということは十分に考えられる。しかし、漢籍から直接日本に入ったものと、朝鮮を経由して入ったものとを文献的証拠に基づいて区別することはほとんど不可能である。

次のようなことわざも韓日共通のものである。

- (2) 구르는 돌에는 이끼가 끼지 않는다 (転がる石に苔がつかない) 【転がる石には苔が生えぬ】 < A rolling stone gathers no moss.  
 무소식이 희소식 (無消息が喜消息) 【便りのないのはよい便り】 < No news is good news.  
 물에 빠진 놈 지푸라기라도 잡는다 (水に溺れる者は藁でもつかむ) 【溺れる者は藁をもつかむ】 < A drowning man will catch at a straw.  
 일석이조 (一石二鳥) 【一石二鳥】 < To kill two birds with one stone.

토끼 둘을 잡으려다가 하나도 못 잡는다 (二羽の兎を捕まえようとして一羽も捕まえられない) 【二兎を追う者一兎をも得ず】 < If you run after two hares, you will catch neither.

하늘은 스스로 돕는 자를 돕는다. (天は自ら助けるものを助ける) 【天は自ら助ける者を助く】 < Heaven helps those who help themselves.

これらのことわざが形式と意味の両面において日韓で共通性を持つ理由は、西洋起源のものであると推定されるからである。明治以降（韓国においては開化期以降）日本も韓国も近代化のために英語を重要視し、その教育に大いに力を注いできた。その過程で、慣用句の一部としてことわざが取り入れられることになったのである。日本においてはその受容の過程に関する詳細な文献的研究がなされている。<sup>2)</sup> 韓国ではこの種の調査、研究はほとんど行われていないのが実情であるが、上に掲げた例については、日本と同様、西洋のことわざが取り入れられたものであることは間違いないであろう。

ただし、これらのことわざが日本と韓国に独立に取り入れられたのかどうかは明らかではない。その可能性が高いと思われるが、当時の韓日関係を考えると、まず日本語に入った西洋のことわざが日本語を通じて韓国語に入ったという可能性も否定できない。英語の表現を自国語に取り入れるのに日本は韓国に二三十年先んじており、日本語を学んだ韓国人が多かったことを考えれば、その可能性は捨てきれない。特に、「일석이조」(一石二鳥)は、日本語、韓国語ともに四字成語として翻訳されているので、独立に受容されたものとは考えにくい。証明は難しいが、初出の例を探し、その文献や著者について情報が得られれば、独立に入ったものか日本を経由して入ったものか凡その推測ができるのではないと思われる。日本を経由して韓国に移入されたということが確かめられれば、それも韓日接触の痕跡ということになる。

意味と形式が共に共通するもので共通の起源が確かめられていないものもかなりある。

(3) 가까운 남이 먼 일가보다 낫다 (近い他人が遠い一家よりましだ) 【遠い親戚より近くの他人】

가는 손님은 뒤꼭지가 예쁘다 (帰るお客は後ろ姿が美しい) 【客と白鷺は立ったが見事】

- 개도 닷새가 되면 주인을 안다 (犬も五日飼えば主人を見分ける) [恩を忘れてはならない] 【犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ】
- 고생 끝에 낙이 온다 (苦勞の末に樂が来る) 【苦は樂の種】
- 고양이가 발톱을 감춘다 (猫が足の爪を隠す) 【能ある鷹は爪を隠す】
- 고추는 작아도 맵다 (唐辛子は小さくても辛い) 【山椒は小粒でもぴりりと辛い】
- 곡식 이삭은 잘 될수록 고개를 숙인다 (稲穂は実るほど頭を下げる) 【実るほど頭を垂れる稲穂かな】
- 기르던 개에게 다리를 물렸다 (飼い犬に手をかまれた) 【飼い犬に手を噛まれる】
- 나는 새도 떨어뜨린다 (飛ぶ鳥も落とす) 【飛ぶ鳥を落とす勢い】
- 놓친 고기가 더 크다 (逃がした魚がもっと大きい) 【逃がした魚は大きい】
- 누워서 침 뱉기 (あお向きに寝て唾を吐く) / 하늘 보고 침 뱉기 (天を仰いで唾吐き) 【天を仰いで唾する】
- 단술에 물 붓기 (焼けた釜に水を注ぐ) [何の効果もない] 【焼け石に水】
- 도마에 오른 고기 (まな板に登った魚) 【まな板の鯉、俎上の魚 (そじょうのうお)】
- 도토리 키재기 (どんぐりの背比べ) 【ドングリの背比べ】
- 돌다리도 두들겨 보고 건너라 (石橋も叩いてみて渡れ) 【石橋も叩いて渡る】
- 모래 위에 쌓은 성 (砂の上に築いた城) 【砂上の楼閣】
- 모르는 게 약이다 (知らないことが薬だ) 【知らぬが仏】
- 물 밖에 난 고기 (水の外に出た魚) 【陸にあがった河童】
- 바늘 구멍으로 하늘 보기 (針の穴から天覗き) 【葦の髄から天井覗く】
- 비 온 뒤에 땅이 굳어진다 (雨降ってから地が固まる) 【雨降って地固まる】
- 사공이 많으면 배가 산으로 올라간다 (船頭が多ければ舟が山へ登る) 【船頭多くして船山に登る】
- 새우 미끼로 잉어 낚는다 (海老の餌で鯉を釣る) 【海老で鯛を釣る】
- 세 살 버릇 여든까지 간다 (三歳の時の癖八十歳まで続く) 【三つ子の魂百まで】
- 쇠 귀에 경 읽기 (牛の耳に経を読む) 【馬の耳に念仏 / 牛に経文 / 犬に念仏猫に経】
- 썩어도 준치 (腐ってもヒラ) 【腐っても鯛】
- 아이 싸움이 어른 싸움 된다 (子供のけんかが大人のけんかになる) 【子供の喧嘩に親が出る】
- 얕은 내도 깊게 건너라 (浅い川も深く渡れ) 【浅い川も深く渡れ】
- 원숭이도 나무에서 떨어질 때가 있다 (猿も木から落ちる時がある) 【猿も木から落ちる】

젊어 고생은 사서도 한다 (若いときの苦勞は買ってでもする) 【若いときの苦勞は買うてもせよ】

죽은 자식 나이 세기 (死んだ子の年を数える) 【死んだ子の年を数える】

중이 미우면 가사도 입다 (僧が憎ければ袈裟も憎い) 【坊主憎けりゃ袈裟まで憎い】

털어서 먼지 안 나는 사람 없다 (はたいてほこりの出ない人はいない) 【たたけば埃の出る】

하면 된다 (やればできる) 【なせばなる】

한번 옆지른 물은 다시 주워 담지 못한다 (一度こぼした水は再びすくうことができない) 【覆水盆に返らず】

これらのことわざについては、これまでのところ共通の起源は見つかっていない。まだ知られていない共通の起源があるのかもしれないし、どちらかのことわざが他方に取り入れられたのかも知れない。後者であるとすれば、それは民衆レベルでの韓日関係の産物である。韓国のことわざに関する歴史的研究はほとんどなされていないため、このような問題に対して現状では何も答えることができない。韓国ことわざ研究、韓日比較ことわざ研究の今後の重要課題の一つである。

(1) や (2) のことわざとは異なり、これらのことわざについては、これまでのところ共通の起源は見つかっていない。まだ知られていない共通の起源があるのかもしれないし、どちらかのことわざが他方に取り入れられたのかも知れない。あるいは、偶然の一致であるという可能性もある。しかしながら、このようなことわざに関する以上のような問題に対して、現状では何も答えることができない。その最も大きな理由は、韓国のことわざに関する歴史的研究が不十分であるためである。韓日比較ことわざ研究の今後の重要課題の一つである。

異なる文化のことわざが、意味においても表現形式においても、偶然似ているということはそれほど珍しいことではない。たとえば、エジプトのことわざ「船頭が二人いると船が沈む」ということわざがあるそうであるが、(3) に挙げた「船頭多くして船山に登る」と同じ意味であり、表現も非常に似ている。しかし、日本や韓国のことわざがエジプトに伝わった、あるいはその逆にエジプトのことわざが伝わったとは考えられにくいいため、おそらく偶然の一致であると考えられる。

しかし、(3) のようなことわざはやはり何か理由があつて、日本と韓国でよく似たことわざが使われていると考えるのが自然であろう。つまり、日本のことわざが韓国に伝わったか、逆に韓国のことわざが日本に伝わったと考えるのが自然であろう。しかし、それを証明するのは容易なことではない。

伝わった時期、伝わった方向について様々な可能性が考えられるが、最も可能性が大きく、また運が良ければ証明することができるかも知れないと筆者が考えているのは、(3) のことわざの中に、日本統治時代に日本から韓国に入ったものがあるのではないかという可能性である。先述のように、日本統治時代に数多くの日本語が韓国語の中に取り込まれ、その多くは、現在、完全に韓国語の一部となってしまっている。それほど大規模で深い接触であったことからすれば、日本統治期に日本のことわざが韓国に入ったとしても不思議ではない。

ただし、このように問題を絞ったとしてもそれを証明するのは大変な作業となる。まず、(3) のことわざが日本統治期以前から日本にあったことを確かめなければならない。これは、比較的簡単にできるのではないかと思われる。日本ではことわざの来歴についてかなり詳しく調査が行われていて、大部分のことわざについて、出典や初出の文献が明らかにされているからである。

問題は次の段階である。(3) のことわざが、日本統治期以前には韓国で知られていなかったこと、用いられていなかったこと、そして、その初出の例が日本統治期以降であることを確かめなければならない。これが大変な仕事になると思われる。残念ながら、韓国においてはことわざの歴史的な研究が乏しく、来歴のわからないものが非常に多いためである。1 つのことわざについて調べるだけでも、膨大な量の文献を調査しなければならないであろう。幸い、最近古い文献のコーパス化が進められているので、作業はかなりスピードアップできると思われるが、それでも一朝一夕にできる仕事ではない。多大な労力と時間を要すると考えられる。

このような例はことわざ以外の慣用表現にも見られる。例えば、太陽が出ているのに雨が降るような天気を指して、日本語では「狐の嫁入り」と言う。これに対する韓国語の一般的な表現は「호랑이가 장가 가는 날」(虎が結婚する日)であるが、その他に「여우가 시집 가는 날」(狐が嫁入りする日)という表現もある。後の表現が元々韓国語にあったものなのか、日本語から入ったものなのか、あるいはその他の理由があつて日韓で共通の表現が用いられているのか明らかではない。

表現形式の類似性にこだわらなければ、日韓で共通することわざはいくらも挙げる事ができる。次はその一部である。<sup>3)</sup>

- (4) 가랑잎이 솔잎더러 바스락거린다고 한다 (カシワの葉が松葉に向かってかさかさ  
と音を出すという) 【目くそ鼻く소를笑う】  
 갖바치 내일 모레 (革靴屋の明後日) 【紺屋の明後日／医者の只今】  
 개도 다섯가 되면 주인을 안다 (犬も五日飼えば主人を見分ける) 【犬は三日  
飼えば三年恩を忘れぬ】  
 고양이 앞에 쥐 (猫の前のネズミ) 【蛇に睨まれた蛙】  
 고추는 작아도 맵다 (唐辛子は小さくても辛い) 【山椒は小粒でピリリと辛  
い】  
 고자쟁이가 먼저 죽는다 (告げ口屋が先に死ぬ) 【人を謀れば謀られる】  
 국에 던 농 물보고도 분다 (汁にやけどをした者が水を見ても吹く) 【糞に懲  
りて膾を吹く】  
 글 못한 농 붓 고른다 (文章の下手な者が筆を選ぶ) 【弘法筆を選ばず／下手  
の道具調べ】  
 굼어 부스럼 (搔いてできた腫れ物) 【藪をつついて蛇を出す】  
 금강산도 식후경 (金剛山も食後の景色) 【花より団子】  
 급히 먹는 밥이 목이 멘다 (急いで食べるご飯は喉につかえる) 【急いては事  
をし損じる】  
 기는 농 위에 나는 농 있다 (這う者の上に飛ぶ者がいる) 【上には上がある】  
 남의 떡이 커 보인다 (人の餅が大きく見える) [人の物は自分のよりよくみえ  
るものだ] 【隣の花は赤い】  
 낮말은 새가 듣고 밤말은 쥐가 듣는다 (昼の話は鳥が聞き夜の話は鼠が聞く)  
【壁に耳あり障子に目あり】  
 냉수 먹고 이 썩시기 (冷水を飲んで齒をほじくる) 【武士は食わねど高楊枝】  
 더위 먹은 소 달만 보아도 혈떡인다 (暑氣当たりした牛は月を見るだけでもあ  
えぐ) 【蛇に噛まれて朽ち繩に怖ず】  
 도둑맞고 사립문 고친다 (泥棒に盗まれて竹の門を繕う) 【泥棒を捕らえて繩  
をなう】  
 독 안에 든 쥐 (甕に入った鼠) 【袋の中の鼠】  
 돈만 있으면 귀신도 부릴 수 있다 (金さえあれば鬼神をも思いどおりに使え  
る) 【地獄の沙汰も金次第／金が万事の世の中】  
 들으면 병이요 안 들으면 약이다 (聞けば病氣聞かねば薬) 【知らぬが仏】  
 딸이 셋이면 문을 열어 놓고 잔다 (娘が三人いれば門を開けて寝る) [娘が多  
いと財産がなくなる] 【娘三人持てば身代潰す】

- 먹을 가까이 하면 검어진다 (墨を近づけると黒くなる) 【朱に交われれば赤くなる】
- 며느리가 미우면 손자까지 밉다 (嫁が憎いと孫まで憎い) 【坊主憎けりゃ袈裟まで憎い】
- 모난 돌이 정 맞는다 (角ばった石がのみで打たれる) 【出る杭は打たれる】
- 모르는 게 약이다 (知らないことが薬だ) 【知らぬが仏】
- 못된 나무에 열매만 많다 (育ちの悪い木に実ばかりが多い) 【貧乏人の子たくさん】
- 무쇠도 갈면 바늘 된다 (鉄も磨けば針になる) 【石の上にも三年】
- 물 밖에 난 고기 (水の外に出た魚) 【陸にあがった河童】
- 물은 건너보아야 알고 사람은 지내 보아야 안다. (水は渡ってみなければ分からず人は交ってみなければ分からない) 【馬には乗ってみよ人には添うてみよ】
- 믿는 도끼에 발등 찍힌다 (信じてた斧に足の甲を切られる) 【飼い犬に手をかまれる】
- 밑 빠진 독에 물 붓기 (底の抜けた甕に水を注ぐ) 【焼け石に水】
- 범 없는 골에는 토끼가 스승이라 (虎のいない洞では兎が先生だ) 【鳥なき里の蝙蝠】
- 부부싸움은 칼로 물 베기 (夫婦げんかは刀で水を切るようなもの) 【夫婦喧嘩は犬も食わない】
- 새발의 피 (鳥の足の血) [ごく僅かなこと] 【雀の涙】
- 서투른 무당이 장구만 나무란다 (未熟な巫女が太鼓ばかりけなす) 【下手の道具調べ】
- 선무당이 사람 죽인다 (未熟な巫女が人を殺す) 【生兵法は大怪我のもと】
- 설마가 사람 죽인다 (まさかが人を殺す) 【一寸来いに油断するな】
- 섞을 지고 불로 들어가려 한다 (枯れ草を背負って火に入ろうとする) 【飛んで火に入る夏の虫】
- 서당 개 삼년이면 풍월을 읊는다 (書堂の犬三年で風月を詠む) 【門前の小僧習わぬ経を読む】
- 소 잃고 외양간 고친다 (牛を失くして牛小屋を直す) 【泥棒を捕えて縄をなう】
- 쇠뿔에 미끄러져 개똥에 코 박은 셈이다 (牛の糞に滑って犬の糞に鼻を突っ込んだようなものだ) 【泣き面に蜂】
- 숯이 검정 나무란다 (炭が黒をとがめる) 【目くそ鼻くを笑う】
- 아는 길도 물어 가라 (知っている道も尋ねて行け) 【念には念を入れよ】
- 아니 댄 굴뚝에 연기 날까 (焚かぬ煙突から煙が上がろうか) 【火のない所に煙は立たぬ】

열 번 찍어 안 넘어가는 나무 없다 (十回切りつけられて倒れない木はない)  
 【なせばなる】  
 오는 정이 있어야 가는 정이 있다 (来る情があつてこそ行く情がある) 【魚心  
 あれば水心】  
 옷이 날개라 (衣服が翼だ) [身なりで人の値打ちが変わる] 【馬子にも衣装】  
 의사가 제 병 못 고친다 (医者が自分の病氣を治せない) 【医者の不養生／紺  
 屋の白袴】  
 자라 보고 놀란 가슴 솥뚜껑 보고 놀란다 (スッポンを見て驚いた者が釜の蓋を  
 見て驚く) 【蛇にかまれて朽ち繩に怖ず】  
 잘 되면 충신이요 못 되면 역적이라 (成功すれば忠臣で失敗すれば逆賊だ)  
 【勝てば官軍負ければ賊軍】  
 제 똥 구린 줄 모른다 (自分の糞の臭いのは知らない) 【息の臭いは主知ら  
 ず】  
 쥐구멍에도 별들 날이 있다 (鼠の穴にも陽の差す日がある) 【待てば海路の日  
 和あり】  
 지렁이도 밟으면 꿈틀한다 (ミミズも踏めば身をよじる) 【一寸の虫にも五分  
 の魂】  
 쪼그렁 밤송이 삼 년 간다 (しわになった栗は三年もつ) 【病上手に死に下  
 手】  
 키 크고 심검지 않은 사람 없다 (背が高くてつまらなくない人はいない) 【大  
 男総身に知恵が回りかね】  
 하룻강아지 범 무서운 줄 모른다 (生まれたての子犬虎の怖さを知らぬ) 【驚  
 の巢を鼠が狙う】  
 항우도 낙상할 때가 있다 (項羽も転んで怪我をすることがある) 【猿も木から  
 落ちる／河童の川流れ】  
 헌 짚신도 짝이 있다 (古ワラジにも対がある) 【破れ鍋に綴じ蓋】  
 호랑이도 제 말 하면 온다 (虎も自分の話をすればやって来る) 【噂をすれば  
 影が差す】

庶民의 知恵としての ことわざには 文化의 違이를 超えた 普遍的な部分が 大きい  
 から、韓国と日本のことわざに 少なくとも 意味の上で 共通するものが 数多くあ  
 ったとしても 不思議ではない。その ほとんどは それぞれの文化の中で 独立に 創  
 りだされたものであるが、(4) のように 意味は 同じであるが 表現形式が 異な  
 るということわざも、接触の影響で 生まれた 可能性がないわけではない。意味  
 だけを 借りて 表現を作るということも 考えられるからである。日本のことわざ  
 に「暖簾に腕押し」「糠に釘」「豆腐にかすがい」あるいは「医者の不養生」

「紺屋の白袴」「大工の掘っ立て」「かごかきかごに乗らず」のように、意味は同じであるけれども表現が異なることわざがある。これらは独立に作られたと考えるよりも、どれかが最初に作られそれが手本になって、表現を変えたことわざが作られたと考える方が自然である。同じことが、日本と韓国の間で起こった可能性も否定できない。しかし、それを証明するのは一層難しいことであろう。

#### 4. おわりに

以上に見たように、韓国と日本には互いによく似たことわざが数多く用いられている。しかし、そのことは一般にあまり知られていない。数年前から明治大学で行われている口承文芸の講義に筆者も参加し、韓国のことわざの紹介を行っているが、授業後に学生に感想を書いてもらうと、「韓国に日本と同じことわざがあることを知って驚きました」と回答が少なくない。これは、韓国でも同じである。筆者自身、日本語を習う過程で同じことわざが日本にあることを知って驚いたことが、後にことわざ比較を研究テーマとするようになったきっかけである。

ことわざ研究の分野では、もちろん、韓国と日本に類似のことわざがあることはよく知られている。しかし、その類似性が韓日両文化の接触の痕跡であるかもしれないという視点から考えてみることはこれまでになかったようである。その理由は、一つには両文化が共に漢字文化圏の中で成長・発展し、中国の古典に共通の起源を持つことわざを数多く作り出してきたためであり、また一つには、ことわざには文化の枠を超えた普遍的な面があることが知られていたためである。しかしながら、上に見たように、そのどちらも解釈しがたい類似のことわざが韓国と日本とで用いられているのである。そうした事例が果たして接触の痕跡であったのかどうかを確かめることは、多大な労力と時間を要するであろうが、韓日ことわざ研究の重要な課題である。

比較ことわざ研究は異なる文化のことわざを比較対照することによってその特異性と共通性を明らかにすることを目的にしているのであるが、どちらかと言えば、相違点に焦点が合わされ共通点は背景になる傾向がある。しかし、特異性と共通性は表裏一体のものである。そのどちらに焦点を合わせて考えるかによって、比較結果の持つ意味が大きく変わってくる。韓国と日本のことわざには、形式面においても意味・用法の面においても様々な相違点が見られるこ

とは確かである。それを記述し分析することが韓日比較ことわざ研究の重要な課題である。しかし、共通点の観点から見れば、上の例からわかるように、韓国と日本のことわざは少なくとも意味内容の点においてほとんど同質であるといっても過言ではない。単純に、共通の起源やことわざの普遍性では解釈できない同質性・共通性が感じられるのである。

ことわざは民衆の知恵の結晶である。そのことわざに高度な共通性が見られるということは、民衆の意識、価値観が高度に共通していることを意味する。国際関係、国際交流とは国と国との関係、交流を意味するものではない。人と人との関係であり交流である。しかも、特殊な人ではなく一般の人同士の関係、交流が基本である。韓国と日本との過去の関係を考えるにも、将来の関係を考えるにも、ことわざ比較から推測される民衆の意識・価値観の共通性は重要な視点になると考えられる。

最後に、韓国と日本におけることわざという言語表現の現状について、筆者が感じていることを述べておきたい。

日本では、古い伝統的価値観が急速に色あせつつある大きな流れの中で、ことわざも古臭いものとして忘れられようとしていると言われる。特に、若い世代のことわざ離れが甚だしく、ことわざはもはやクイズ番組の素材にしかならないと言う人もいる。極端な言い方をすれば、日本は「反ことわざ社会」になってしまっているような感じがする。それに対して韓国ではどうかと言えば、やはりある程度日本と同様にことわざ離れの傾向が見られるけれども、まだまだ「親ことわざ社会」であり続けていると言っても間違いではない。筆者の直感的印象であるが、日本に比べればことわざを聞く機会をはるかに多く、ことわざに対する抵抗感もない。子供が使うことはないにしても、大学生ともなれば結構ことわざを交えて話すことが多い。

このようなことわざに対する韓日の温度差を確かめるために、ことわざがどの程度知られているか、ことわざの認知度調査を韓国と日本で二度にわたって行った。<sup>4)</sup> その結果、高齢者層については認知度にそれほど韓日差はないけれども、若年層に関しては、韓国の方が日本より若干認知度が高いということがわかった。その理由として考えられることが二つある。一つは、韓国でも核家族化が急激に進んだとは言え、まだ子供たちは周囲の老人たちの話を聞く機会が日本に比べてはるかに多いという事実である。もう一つは、コンピュータの普及である。PC へのハンゲル入力を練習するためのソフトが何種類も開発さ

れているが、そのどれにも短文例としてことわざが用いられているのである。したがって、中高生のほとんどが、キーボード入力の練習を通じて、少なくとも表現としてのことわざには触れているのである。若年層におけることわざの認知度の日韓差として現れていると考えられる。

かつて日本ではカルタ遊びを通じて子供たちがことわざを覚えたと言う。先述のように、日本統治時代に花札が韓国に入り、現在、それが完全に韓国社会に根を下ろしているのであるが、子供の遊びのカルタは韓国に入らなかった。そのことを筆者は残念に思っていたのだが、現在、韓国の子供たちはカルタに代わることわざ学習の手段を与えられているのである。この手段がもし日本に導入されれば、クイズ番組よりもはるかに効果的に「反ことわざ社会」を「親ことわざ社会」に転換できるのではないかと考えられる。

## 注

- 1) PS リストの上位 1,000 位程度のものに限った。PS リストに関しては鄭 (2007) を参照。
- 2) 例えば北村 (2003) などがある。北村によれば、(2) に挙げたことわざ以外にも、「時は金なり」(< Time is money.)、「艱難汝を玉にす」(< Adversity makes man wise.)、「大山鳴動して鼠一匹」、「鉄は熱いうちに打て」(< Strike while the iron is hot.) などが西洋から伝来したことを論証している。「時は金なり」は韓国では「시간이 금/돈이다」(時間は金(かね/きん)だ)といいよく知られてはいるが、ことわざよりも格言として意識されている。「艱難汝を玉にす」に当たることわざは韓国語にはないようである。「大山鳴動して鼠一匹」に当たる韓国のことわざは「태산명동에 서 일필」(泰山鳴動に鼠一匹)である。これはイソップ寓話を介して伝わったものとされている。「鉄は熱いうちに打て」は韓国語で「강철도 뜨거울 때 때려라」(鋼鉄も熱いうちに打て)と訳されているが、ことわざとしてはほとんど知られていない。
- 3) 形式的な類似性は段階的であり、(3) と (4) の違いは明確ではない。
- 4) 調査の方法及び結果の詳細については鄭 (2007、2009) を参照。

**参考文献**

- 北村孝一 (2003) 『ことわざの謎—歴史に埋もれたルーツ』 光文社新書
- 孔泰瑢編 (1987) 『韓国のご事ことわざ辞典』 角川書店
- 鄭芝淑 (2007) 『日本と韓国のご事わざの比較研究—ご事わざスペクトルと比較ご事わざ学』 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文)
- (2008) 「比較ご事わざ学の可能性」 『言語文化論集』 第29巻2号、pp.433-447
- (2009a) 「日本のご事わざの認知度について」 『言語文化論集』 第30巻1号、pp.181-196
- (2009b) 「ハングル入力練習 PC 教材」 『言語文化論集』 第 31 巻 1 号、pp.107-120
- (2009c) 「日本と韓国のご事わざ比較」 『国文学 解釈と鑑賞』 2009 年 12 月号、至文堂、 pp.155-165